

注目！がん看護における最新エビデンス

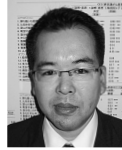
「亡くなった母が天国から迎えに来た」お迎え現象はどれくらいの患者が経験するのか？

Morita T, Naito AS, Aoyama M, Ogawa A, Aizawa I, Morooka R, Kawahara M, Kizawa Y, Shima Y, Tsuneto S, Miyashita M, Nationwide Japanese survey about deathbed visions: "My deceased mother took me to heaven", J Pain Symptom Manage. 2016; 52 (5): 646-654.

「お迎え現象」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？ 看取りが近くなった患者が「亡くなった母が天国から迎えに来た」などと言うことがあります。「何を言っているのよ、縁起でもない」「せん妄では？」などと片づけてしまいがちですが、もしかしたら患者にとって死を受容するためのプロセスの一つなのかもしれません。

お迎え現象に着目しその言葉を広く知らしめたのは、我が国の在宅緩和ケアのパイオニアである故・岡部健先生でした。岡部先生の遺言とも言える「お迎え現象の全国的な疫学調査」が、2014年に多施設遺族調査J-HOPE3研究の付帯研究として実施されました。

2014年に実施されたJ-HOPE3研究では、2,226人（一般病棟733人、緩和ケア病棟594人、在宅939人）から回答が得られ、全体では21%（464人）の遺族がそのような体験があったことを報告しました（図1）。この時見えていたものは「亡くなった両親」が67%、「亡くなった兄弟」が24%、「亡くなった友人・知人」が16%でした。「天国・あの世・浄土の風景など」を見たという回答は19%、「川・トンネル・橋などの境界」を



宮下光令 教授

東北大学大学院 医学系研究科
保健学専攻 緩和ケア看護学分野

みやしたみつりのり：1994年3月東京大学医学部保健学科卒業。臨床を経験した後、東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻助手・講師を経て、2009年10月東北大学大学院医学系研究科保健学専攻緩和ケア看護学分野教授。専門は緩和ケアの質の評価。

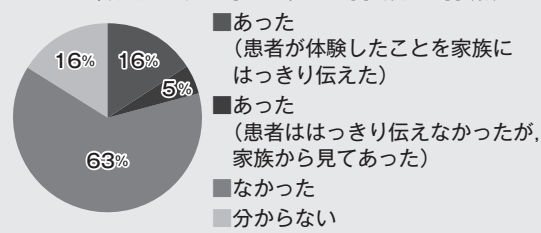
見たという回答は13%でした（表）。

この患者の体験に対する患者・家族の感情としては、否定的な感情（怖かった・不安だった）と感じた患者が19%、家族が22%、肯定的な感情（安心した・ほっとした）と感じた患者が24%、家族が12%でした（図2）。

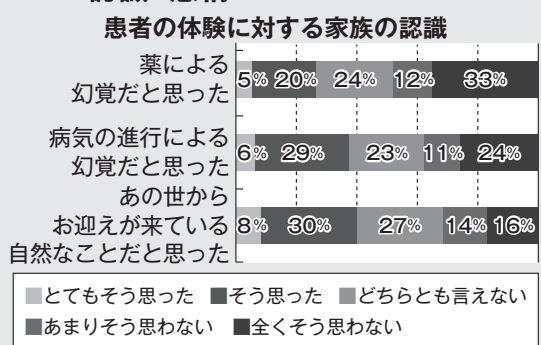
このような現象を体験した家族が、医師や看護師に求めるケアについて図3に示します。78%の家族が「非科学的と決め付けず、現実を受け入れて一緒に考えること」と回答しました。このような体験が起こる割合は、高齢患者や女性の患者で多かったですが、死亡場所（一般病棟、緩和ケア病棟、自宅）で統計的に有意な差はありませんでした。また、このような体験をした患者としなかった患者で穏やかな死を迎えられたか、Good Death Inventoryという尺度で比較した結果は、統計学的に有意な差は見られませんでした。

「お迎え現象」はせん妄に似ており、実際にせん妄を呈している患者も少なくないと思われれます。ただ、多くの臨床家が明らかにせん妄とは思えない患者から同様の発言を聞いており、必ずしも全例がせん妄であったと決め付けることはできないと考えられます。海外の研究では、多くの患者にとってこのような現象が心地よい体験であったという報告もありますが、本研究ではそのような回答は必ずしも多くはありませんでした。その理由は、家族が「お迎え現象」だけでなく、死亡

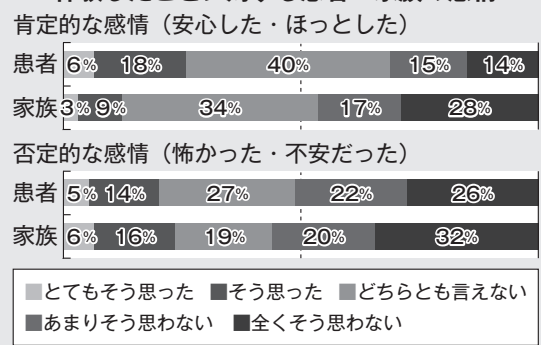
《図1》故人やあの世を見た体験の有無



《図2》故人やあの世を見た体験に対する認識・感情



体験したことに対する患者・家族の感情



※図の合計が100%にならないのは、欠損値があることによる

前の同時期に起こったあまりよくない経験も思い出したからかもしれないと考察されています。

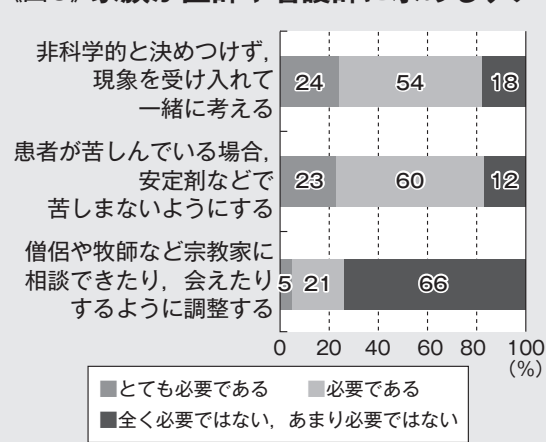
図3で示されたように、家族は患者の体験について「非科学的と決めつけず、現実を受け入れて一緒に考えること」を望んでいます。この対応は、せん妄を呈する患者に対するものと基本的には同様で、「そんなこと(例えば、故人が枕元に立つなど)はあり得ない」「単なるせん妄でしょう」といった対応ではなく、患者がどのような体験をしているの

《表》見えていたもの

		N(%)
見えていた「人」	亡くなった両親 (母177, 父133)	310 (67)
	亡くなった兄弟	113 (24)
	亡くなった友人・知人	76 (16)
	亡くなった子供	52 (11)
	亡くなった配偶者	40 (8.6)
	亡くなった親戚	20 (4.3)
	ペット	8 (1.7)
	亡くなった祖父母・先祖	6 (1.3)
見えていた景色	天国・あの世・浄土の風景 (花畑など)	88 (19)
	川・トンネル・橋などの境界	59 (13)
	神・仏	45 (9.7)
	光	33 (7.1)

(故人やあの世を見た体験があった、と答えた464人が母数)

《図3》家族が医師や看護師に求めるケア



※図の合計が100%にならないのは、欠損値があることによる

か、その体験を患者・家族がどのようにとらえているのかをアセスメントし、個別性を重視した対応をすることが必要と考えられます。家族は「患者がおかしくなってしまった」「死が近いのではないか」などと不安を呈することも少なくないため、家族の訴えを聞くことも大切ですし、また、このような現象について、「非科学的」「医療とは関係ない」という理由から家族は医療者に話すことが少ないということも心に留めておくといえます。